

彩の歳事記

平成二十二年 九月

野辺見れば **なでしこの花** 咲きにけり わが待つ秋は 近づくらしも

万葉集

「野を見るとなでしこの花が咲いています。私が待っている秋が近づいてきたようです」

華やか・上品・奥ゆかしく繊細な撫子は、花期が夏から秋に渡ることから、古くは常夏(とこなつ)とも呼ばれ「源氏物語」の巻名にもあり、庭に色々な「トコナツ」を彩り良く植えていた様子が描かれています。「撫でし子」の表記からこともや女性に例えられ、和歌などに多く詠まれました。「枕草子」に「草の花はなでしこ、唐のはさらなり やまどのもいとめでたし…」とあるように当時の貴族に愛されたようです。山上憶良の歌に

「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花」萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 藤袴 朝貌(あさがおの花)



九月の異称

長月(ながつき) 夜長月の略。新暦では十月下旬から十一月上旬にあたり、夜が長くなる。

九月の暦

一日 防災の日 関東大震災(NT7.9)死傷者・行方不明者(2)万人以上(を教訓として防災意識を高める為 1960年に制定された。メディアの関心も高まり特集が組まれることも。

二十十日【雑節】立春から二十十日目で嵐が到来する時と恐れられた。夏目漱石の小説「二十十日」はユーモアと社会に対する厳しい批判精神が同時に味わえる作品で阿蘇山が舞台。

二日

天心忌(てんしん忌)

東京美術学校、日本美術院を創設と近代日本美術界に貢献した岡倉天心



【1863~1913】の忌日。台東区谷中の岡倉天心記念公園(横山大観【1868~1958】と共に設立した日本美術院の跡)にある六角堂には平櫛田中【1872~1979】作の天心坐像が安置されている。

おわら風の盆(「一日~三日」富山県八尾(やっも)の民謡行事。胡弓の調べと越中おわら節の響きが初秋の哀愁を漂わせる。

八日

白露(はくろ)

【二十四節気】秋が本格的に到来、草花に朝露がつくようになる。



秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを月をし待たむ

大伴家持【718~785】

九日

重陽の節句(ちやうよう)

陽数(奇数)の一番大きな数【九】が重なることから、古代は特にめでたい日とされた。邪気を祓い、長寿を願って、菊を飾り菊酒を酌むことから「菊の節句」とも。

十九日

子規忌

俳人・歌人、正岡子規【1867~1902】の忌日。四国松山の人。明治三十一年の



歌論「歌よみに与ふる書」では、万葉集を特に高く評価し、万葉への回帰、写生による短歌創作活動を続けた。終の棲家、台東区根岸の子規庵は現存し、当時の生活が窺がえる。

二十日

敬老の日(第三月曜日) 国民の休日

二十二日

仲秋の名月

幼稚園や老人ホームなどで「お月見会」が季節の行事として催される。

二十三日

秋分の日(二十四節気) 彼岸【二十日入り 二十六日明け】の中日。昼夜同じ時間に。

九月の歌

うさぎ

わらべうた



「月とうさぎの関係」インドの仏典から「昔、仲良く暮らしていたサルとキツネとウサギが、ある日行き倒れの老人を助けようとし、サルは木登りで木の実や果物を集め、キツネは俊足で川で魚を獲った。ウサギは、どんなにしても何も採ることができず、それでも老人を助けたいとサルとキツネに「自分を火で焚いて肉を差し上げて」と言い残し、火の中へ飛び込んだ。老人は実は帝釈天で、捨て身の慈悲行に感心し、ウサギを月へと昇らせ永遠にその姿を留めさせた」

月のウサギの周りに煙状の影が見えるのは、自らの身を焼いた際の煙だと言う。

うさぎ うさぎ
なに見てはねる
十五夜お月さま
見てはねる